# 「ふがい城」

## ――発掘記録をもとにして――

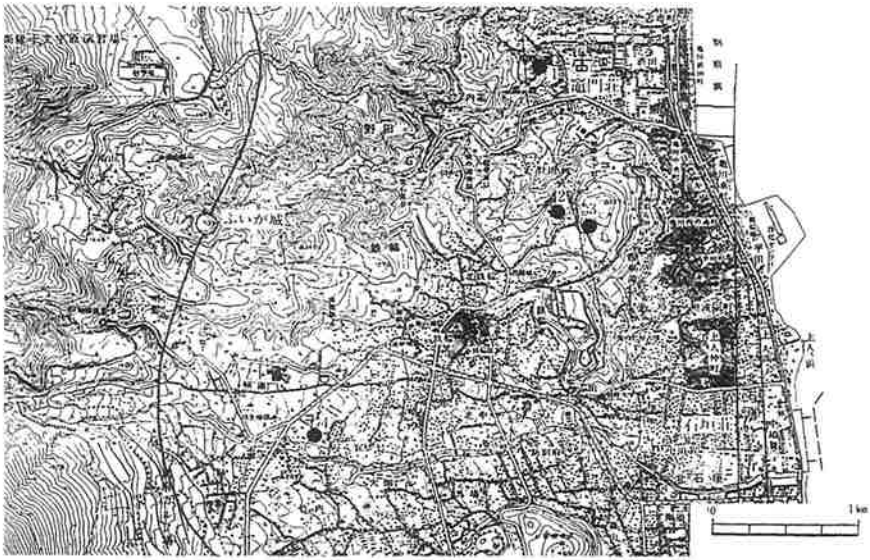
土屋公照

県道別府―安心院線を鉄輪より明礬を通って湯山に抜ける途中に、九州横断自動車道と立体交差する場所がある。この場所から十文字高原とのほぼ中間に、独立して台形に見える小高い丘陵がある。この丘陵の頂上を横断して九州横断自動車道がのびている。

この丘陵を「ふいが城」と呼び、地元では、かつてこの頂上付近に城塞があったといい伝えている。小字名も「ふいが城」である。

この地名については、湯山史考という小冊子に湯山城或るいは宇土城、藤ケ城址と記されているので、「藤ケ城」が「ふいが城」となまったのではないかと考える。

この地には古来より、宇佐へ抜ける豊前佐田越の道路がはしっていた。この道を江戸時代では「お上使道」と




ふいが城遺跡と周辺遺跡(中世)　1 鴛門八幡社　3 羽室遺跡
2 御霊社石塔群　4 火男火売社(散布地)

呼び、巡見使もたびたび通行したと伝えられる。「ふいが城」の付近は、交通の要衝であった。

中世、豊後国主大友氏はこの要衝の地に城塞を築き、代々家臣の谷川氏に守護を命じていた。（伝承）

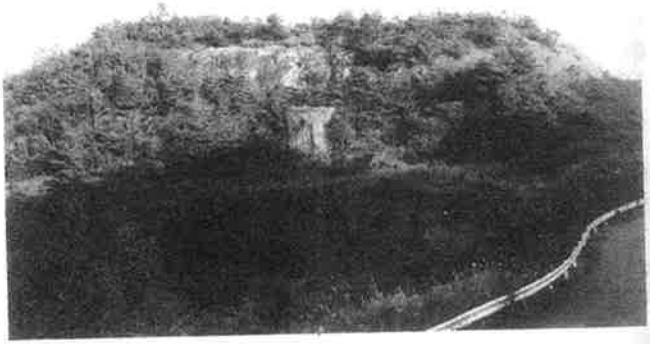
弘治三年（一五五七）に大友宗麟が宇佐郡龍王城を攻めたとき、城主谷川美濃守が出兵の催促に応じなかったので、矢田作十郎信孝に命じて誅殺させた。（「別府史談」創刊号―局観音の由来について―矢田　保　参照）

なお、美濃守の墓は城址の下、大溜池の畔（ほとり）に残っている。銘は高岳宗幢菴主と彫られている。美濃守の妻は、落城後に北鉄輪の子安温泉を開いたといわれている。

「ふいが城」は、文禄二年（一五九三）大友氏の滅亡と共に廃城になったと伝えられる。

この遺跡のある湯山は、平安時代には宇佐弥勒寺領の竈門荘内に含まれていた。弘安八年（一二八五）作成の土地台帳「豊後国図田帳」に

竈門荘　　本荘五十三町　御家人竈門又太郎貞継法師
地頭　　小坂村十七町　大将家法花堂別当僧都　御房　法名　道喜



「ふがい城」全景（西より）

平湯立小野村

十町　鶴見村加納　大友兵庫入道　殿

とあり、この内、平湯が現在の湯山、立小野が田通野、加納が鉄輪ではないかと思われる。（「別府史談」一二号―竈門荘の荘域―拙稿）

また、同じく図田帳に鶴見社御神領として十五町があり、領家が延暦寺で地頭が大友兵庫入道となっている。この十五町は現在の火男火売神社附近であろう。そうであるならば、鶴見・鉄輪・田通野・湯山と、別府より豊前への最短距離の道沿いの村々は、豊後国守大友頼泰が押さえていたわけである。

さらに、大友十代親世の「所領・所職注進状案」という、永徳三年の古記録がる（大分県史料二六）。この中に別府市内に関係する所領の地名が三ケ所ある。宝満寺（浜脇）・野田村・鶴見村である。この野田村は湯山のことであろう。つまり、野田村の本村は竈門本荘の野田村で、当時竈門氏の館があったという伝承と共に、同氏の墓地（御霊社）も残っていることでも証明できる。大友惣領家支配の野田村は本荘野田村の枝郷で、おそらく湯山を指すと考えざるをえない。

豊前佐田越道の要衝は、代々大友惣領家の支配のもとに固められてきたのであろう。

註　貞治三年（一三六八）大友八代氏時の所領注進状には野田村が欠落している。これはおそらく鶴見村の中に野田村（湯山）を含めたか、書き落しではないかと思われる。

弘安図田帳より大友惣領家の所領・所職は、建武の内乱以来恩賞の増加により大きく成長している。このような中で湯山（野田村の枝郷）だけを他に譲ることは考えられない。

この丘陵を、昭和六十一年九州横断自動車道の建設工事にあたり、大分県教育委員会が埋蔵文化財発掘調査を行なった。この「ふいが城」遺跡は、柴石川の最上流部にあたり、標高三九二米の独立した丘陵である。

発掘調査にあたり、城塞を思わせる石垣等の顕著な遺構はなく、空堀らしきものが見られた。報告書には「城

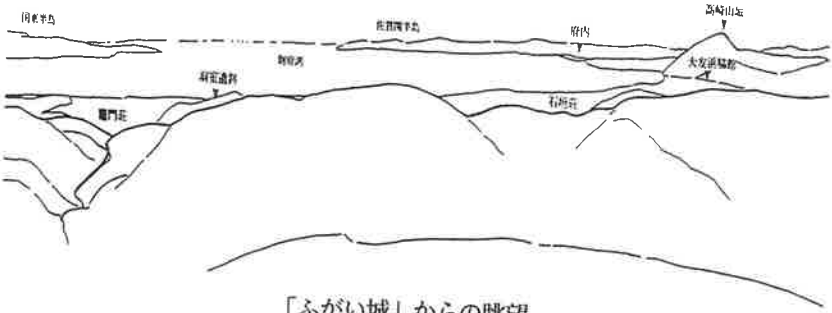
址は、一重の外堤と空堀（堀切）をもつ単郭式の山砦であり、構造としては極めて単純なものであるが、空堀の規模も大きく、かつては速見郡内における重要な支城の一つであった可能性をうかがわせた。」と述べられている。出土した遺物から十五世紀前半より十六世紀前半の（室町時代）どこかで城郭の築成が行なわれた可能性があるとしている。

遺物としては、九世紀より十世紀頃（平安期）に至る須恵器益・土師器（ほとんどが土師器）と、同じく十四世紀前半より十六世紀（室町期）の土師器が多く出土した。瓦器は十五世紀前半以後のものである。

「ふいが城」は、中世の館とは異なり、人々の生活地域とは相当離れた位置にあり、或いは豊前方面への押さえとして、交通の要衝に築かれた山城（砦）であったのではないか。勿論、中世の城であるから、常時多人数が詰めるものではなく、豊前での緊張が伝わると直ちに数十人が立てこもる程度のものであったろう。

さきの谷川美濃守も、北鉄輪辺りに館をかまえ、すわという時に一族郎党を引きつれて「ふいが城」に立てこもり、矢田信孝と戦ったのであろう。

この独立丘陵の城址に立ち東南を望むと、高崎山城・大友浜脇館は一目である。上野の大友館、府内の町々はほぼ真正面に見える。発掘調査によると、頂上付近に烽火（のろし）の設備ではないかと思われる大型の方形炉（縦軸一、三米、幅二、〇米の隅丸長方形を呈する）が見つかっている。「ふいが城」は眺望のきく




「ふがい城」からの眺望

位置から考えて豊前からの情報をいち早く高崎山城・上野の大友館に伝える重要な役目があったのかもしれない。

参考史料

湯山史考「湯山の史址と伝説」　南　好道編

「ふいが遺跡」　大分県教育委員会　日本道路公団

写真は右報告書のものを転載させてもらった。